伏桑拾葉集

十八

伊地知文庫
文庫20
360
21

文庫20
360
21

扶桑拾葉集巻第十八

目録

七百番歌合序　藤原長親
仙源抄波　同
毒聖記　同
むくきのきゝ乃序　後小松天皇
康苑院淮后義滿公法導ゝ師　藤原雅縁
後小松天皇非遊乃記　同
富士紀行　釋堯孝

拾葉集巻第十八

参議従三位兼行右近衛權中將源朝臣光圀編集

伊地知文庫

七百番哥合序

藤原長親

應永廿一年の冬の比小河の甲第とりこうして書筵
紙素とそなへ・光輩後学とえらびに・大和哥を選よ
せしめ給ふ・数十四人・哥百と
称し・千四百首はかりもつて・左右わかちて七百番に
成哥合の判者・廿人かゝ・やまとこゝろ
岡の草とかて・東山の雲・雅俊卿の
らしめ・幼壯の

山々輕霞みわたり雲・鶯もなのめならぬ春の
雪といつめ雪を引かへて・山風慶風のたもとも
詩の歌ゆまつ・首時に花とめて雪とうしろ出て・出雲
八雲のとうしは・やうやうとうしの花ゆ・
心の泉みかさ花のをく・こゝ葉の色匂いとくかゆ
いくしや今雪山ゆとかし・世林ゆ樣とかし
孔父の耳者こゝふ・こゝい遥ゆ・江海こゝ
こゝ・こゝ物こゝ・國語こゝい・こゝ・こゝ
今つゆゆのこゝ・次乃こゝ月乃こゝ
のこゝ国をこゝ者こゝ孫男・都こゝ
てこの神者こゝ・かこゝ・風雅のこゝの

こゝ乃者こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ
俗こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ
俗頼こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ
へて・建安黄初元和永明盛唐・こゝ・こゝ・こゝ
と・こゝ・俗の童俗の詞・こゝ・こゝ・こゝ
哥こゝ・又三代集こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ
ゆて・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ
俗こゝ詞こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ
法華・基俊・俊頼・五条三位・禪門・京極黄門・壬生
二位・世の俗代々の宗匠・こゝ・こゝ・俗意・俗詞こゝ
只風雅の正神とこゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ・こゝ

古賢の詞ゑ・意いかゝ[illegible]とゝ[illegible]ゝ・風
雅の中のかゝしに意と云也・時俗のつゝ[illegible]
かゝ・現ゝ三代集とゝ[illegible]
哥人の[illegible]成て・時代[illegible]詞[illegible]
かん事とかゝみゝ・[illegible]いまゝ[illegible]也・今は世[illegible]
[illegible]と教ゝ・道[illegible]人[illegible]心をゆゝ[illegible]
[illegible]・時俗[illegible]
む・詞[illegible]
[illegible]
[illegible]哥[illegible]・時俗の[illegible]
[illegible]

[illegible]・哥[illegible]俗語也・[illegible]
天地とゝ[illegible]鬼神をやらをんや・道[illegible]
[illegible]
[illegible]哥合の中・この俗意俗[illegible]
この[illegible]
[illegible]と[illegible]・正雅[illegible]邪僻の[illegible]
[illegible]・[illegible]華原の風
[illegible]
[illegible]年[illegible]

仙原抄跋

同

弘和[illegible]
[illegible]・三[illegible]

つれ／＼なぐさめがたく侍し中に、或る源氏の物
語読さしてみるに、おぼつかなき事もおほかりければ、
猶その釈もとめてみ侍るに、花の細流・簡要など
いふなる・枝葉はおほかりし。又同釈も不足に何せで、或
しれる人にたづね問ければ、此源抄五十余巻
眠明抄十二巻・源中最秘抄二巻の中、古人の解釈
らはしめて、自然中学者とらせにしるまじ。一向し
何るを見とのことん、又定家卿の自筆本に比校し奉、
桐壺の巻はらんく侍と、同文字なる詞とてはけし
次第に何侍めさこの人これ、五十余巻只一帖に侍ま、
文字のつゞき読あつかいし、あれに注をくはへ侍し。

らぬれる物しれる人なし。何かさらに秘せらるゝにかとさへ
ぬ。源と見るにて全と見侍るべし。その人ぞ読侍らすまじ
かくしとぞ今よ人と思へし。あやしく人に見せんとは、彼
抄物作者の本意に背くかりしかば、侍らじとや、其のう
え秘する人に、かく見ぬもとなきこともいと侍める
ころなり、秘せさせやうなれども、それらにこの物語よみ
めでさらむ人々との、先賢の注釈などとしれど
事一かなとぞ思ふ人のためにも見え思いて、かくれたく聞
置きに志ありし侍れば、うれしく思はれて一々書付ん人のため
ともならは侍らんかしとて、さて此の物がたりかなしき事、かの
物事の世話事は多かりと思へる事は注し付るよ

ゆるさるゝ。そもゝゝ文字は人の
せんなつくるなり。ふるくは中
比定家卿のさだめ給ふとて。かの
かゝ。考ふるところ。仮名漢字の
はわらて用文字と考へ考へ
なるべし。和字は文字一なり
ゆゑに。ゆゑに用ゐるべき教の
かゝ。或は別の考へと用ゐる
入声也いは以上声也
伊は伊平声なり也
これ多くいふなかれ。
いろは四十七字の用ゐ

とは遠上声又は去声也 紙は紙
或は剖と考へ侵多ゆゑ
とは止上声也 江は江
上也又母は母也
万葉をみて別後くゝし。
はいかをたえ衣の字。

これらをいふへはをわゐ
なつ紀てつうゝ文字也。考へ
やゝみて変とゆゑは和文
和文字つゝ四ふ半とかゝ
なる去聲なり。山のわとかゝ
よはゝ用ふ也。上聲なる薄也
ゝし。和さのゝ。和ゝなるかし
ゆゝも。山用わゝ也いかゝ
和といも和とゝ文和也
のゝ乃いる考へまゝ用ふ
なるゝ。ゆゑに。ゆゑ

とは。ゝゝ文字は
ゆゑ。文字は去聲
ゝ。ゆゑ。ゆゑ

文字なし平上去の三声ハ定まる事なり。されバ加字
と云ふ字ハ上とも下とも云ふ也。かみ神也かみ上也かみ紙也。文
一文字にても は木葉也 は歯也 去らのみなれ。同じせ
同字とても上下にむかふて声々はる事あり。古今典
の経などにもみえたり。声明の音便なども声とともにみえる
事の例多し。それこれのあらゆる事なり。かみしも神々也
又はらしめの如文字ハ去声になる。文一字にても
ても。序破急と云ふなり。破の字平声にもふしハ破の
字を破ほ濁るかも。又和らかハ。去声になるなく
のあつし。ら入よりあり去るぬ。和字にハ文字たかふしハ
てらさめをみなしくもしを。定家卿の流もなり

続乃音と尾の音なむかへてらさめあはれ。音にひきていふ
也へ何かと義あるふあり。去るにも花のらさめある不四
声にもあらん。文一字に義あられ。其文字其割に声
物あしとみえし。音にもいへ義にも声あるハ
見れ篇につきてらさめあるふ和あつかふ。去るにも
みしるにこのつたえとわかるもへさにいふと。文字とへに
ら様と信せは。音義にかなふ通ふらるにかなふ。去の一
帖にハ文字つらいとらさきたる。かつハ先達の下為なさ
みえるにあるなのへらし。声に通さんことのし。とのつう
これならとわかれまへ去れとなり
　　山かの北の源氏さとしめて於

ちのかうしもゆうらきうる

両聖記

同

昔奈良和尚彼山に住し給ふる時、北野天満天神、
ある夜夢に来りて、日本の菩薩と名乗て、衣
冠束帯にて、あり、世尊の御ことの
うつの伝記をかゝのをめるること、ことわりなり
なれども、ひるの中にてこゝめし中、ゝ如
なれば、又おのれこそ、ゝ菩薩と、
なをめしこめ、聖神仙界の法ゝ、星座の
世の比まれなる事なり、三ゝ、ゝ
ゝ

如来の御ゝ、ゆゝ如来の国ゝ、日乃中の内ゝ、
永ゝ、ゝ如来の八宝の表ほうと、ゆゝて、雲乃壽
殿の展、ゝ、ゝ宝と云ことを、ゝ、ゆゝ、ゝ
ゝ法ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ

おいてうきうしをかはせ
の物しみの里とや・代々の御門はほいをかなとりせ
給て・紫乃雲の上とみるもの蘆の河も・位ゝをもゆ
ゑ年をへいらかのうぬ・ら沈又宇多花山の物ゝ
浮沈もこえて・妙林の御書渓の源ゆく・物ゝ
くるをもあきせ給ふ・物ゝ代々御寺の御ゝ
し中しらかの宮・かの仙洞もおきらるゝ・一宇を
あてゝ仏てうつ位ゆ・しかと・観光房と申
きて・光かゝれ法華経・法ゝ浦ゝ・法ゝ徒の宮宿河
ゝのみものゝとゝ・ゆゝをゝ・ゆゝをゝ・ゆゝ
今は遠林を暮ゝらゝ其人ゝ・ゆゝ・明徳の

比丘僧乃傳月渓の爰ゝ・おゝ・ゝ鴻の中ゝ一ゝ壇ゝ
壇の上ゝ賓塔ゝ・塔ゝ法華の物ゝ安置ゝ
ゝの加ゝゝゝ嵯冠威張ゝ・法ゝ如ゝ唐ゝのゝ
ゝ貴人ゝ法ゝ・諸ゝ人ゝ思ゝ法ゝ・虛空ゝ
夢ゝ・ゝ芦ゝ山野ゝ天満大自在天神ゝ
ゝゝゝ・天慶ゝ・ゝ通貫ゝ云僧
行力勇猛ゝ功ゝ・冥助ゝ如ゝ芳野ゝ報
横現・ゝ・ゝ山野ゝ天満天神ゝ
ゝ白ゝ・ゝ飛ゝ
ゝ数百里ゝ・ゝ
ゝ・ゝ載ゝ・其ゝ庄ゝ

夢ゝ露かゝる事かゝ・手指應永元年の秋・幽月
同門の僧・忠菴の如くにて・元神・出準を受衣し給
き・法姿と圓しかる形象にて・幽林をもかる月渓
うれしとみるを・爰を見ものし儀・衣冠をそなへと
かゝ・いとを不思議なるこゝをもれん・幽林感歎のあまり
作ゝ・是をいとをいめゝ・無菴をたゝ
實語誠あるて・中を法華経安しかるとて道
賢いゝ作を舞し・月渓の夢を今・括婆法華と
礼をなし・又をあゝ作を彼真新・こゝを隆作し
由ゝまた・うれしゝを祖宗と由ゝ・法道をたゝ
まし由を〳〵神を思ゝ・緩過はいゝ・機感相應を

事ゝ・信心ゝ物ゝ・當應永代分
古地・神を勸請ゝ・朝夕の燒香・供養懇誠と
作ゝ・かゝ紀伺をつゝまるゝ・こゝのをと
作笑て・和尚を・法樂しを・道場開基の
僧と・とゝ・とゝ・志とゝの通て・ゝ・一神とかゝ
者幽林を由ゝ・年・日渓と
ゝ・年・
名ゝ作ゝ去ゝ・蓋と・物をゝ物ゝ・
つゝんやとゝ・歳命のゝ・身ゝ・
作ゝ由ゝ・作を下ゝ・
つとゝ・有と云ゝ・古ゝ今ゝ・

人あり・万象歴然として目前にあるが如し・是を
と云なり・これにて見れば・仏かの・衆生なり・天地日月
山川草木も皆悉く化かの・九流百家四書五経
諸子の書も皆悉く化なり・云伝へ・名字のみ立て
実体なし・しかるに・しかるに・しかるにやはり・実体なきい
らん・かんと云・此真理を拡充の中につとめ
て真偽の跡迹と海内・実体いかる人を・聖神
いたるまで・なかるべからざるなり・
しかるに有名の落雲・しかるに・しかるに・聖の志
神と知る・若者・すべて・祖師と・神明と
憎む者・いかてうらんと思へる・此神儒

きかん人・こゝなを以て分と・聖神傳衣の霊言
冥合して・又幽林飯敬の中に・真筆簡を
かるべしと・ふ事・疑うべ

神と仏と法を問ふて信ずる
三世衣のうらみのこと
仏の法を学ぶ者と
うらむ世のこと人のみたん

知足

毋底のうのものみとかくるもの
こゝは心野の如をうらもん
神とかと天倫元りとへて

しれ月にくらまりかへしまね

むくさの経の序

後小松天皇

毎ことの方ありしかれと・法にあらしまりて六種
なり 梅花 落葉 荷葉 侍従 菊花 黒方 梅花は春のむめのかをうつし
香にかよへり・荷葉は夏のはちすにうつし香にか
よへり・菊花は秋のきくの香にまさる香にかよへり・落
葉は冬の木の葉のちるをうつしてかはらにて
かよへり・時にまさしいて昔の人は何をかさねて今の世
はゆしく見てもなりたしや・その比を得て今の菊
花のなりしは何をもそこし・なかしたると花・

世のまよの人の出女の字・侍従は乙侍従の女房の
かくさせ女めれと・花の名をとりてつる字・山田の戸を
うしめへ侍従をいふ由へ・これがかくれおもかせも読し
ど・いわり・そうれかくし花のもとの本を・相任る・
りのまかいなる字・黒方はまくれとのかほへまそは
玄の玄といふみて君のきとふると・くらき方といふ
くれまかると・塔の人のかほまりて黒方とかくと云字
何やまりとかくあめそその字とかくし・くらる・をま
例もれに・かみにその字とかくかり・侍従黒方こゝろ
ゆかしくさか・霜中比のうちいろにかかせらむとつる
毎りこれと人のゆくへしきつ・ゆるかに梅みよ花

を見しをもみたまうりしのちもうぶみて・かくかく
をうけとりて・人のみ歌をうけとりて・ふるのもめぐりあひて序代はの
の

鹿苑院准后義満公とうさの辭

藤原雅縁

鹿苑院殿の御事・いかなりしかぶ世にてこの家過
かくかうしきせ給きる事・かんと・世のおもひ沒うこれ
えのるこ中し・とうらかるこ・おのうと世とおもひ
くいくとものを・ゆたとしこしいせくと
かとこ・給事・世の去る不かんと・今天下の風
おとのこ・こ・不驕うしおもくはうへ

まる事・とうかるこ・かうしも・おうしみちを去こうい
酬報の場をもいるあてまるのみかたのいるい
宸宴の暮の間を去こうい・あるいと神事法令のた
りをかれて・過ま・かくのかうし・かをくを去
のつとすれと・涙のみすみて・愛とをもるよ御をくを
し・中かをいたるの行事・心月の法うのうのの
ぎて・花のうるとと御のくせくあるきれた・二月の
生活をとりこめて・供奉のくををを
されて・年不の御まを・諸家のをみを・ちまを
待しを・多の御かをいとはくされは・さうるの
あをりれて・誘通しとの法はうをもるとつこ・すこ

れゆる試ねらし侍る時にのぞいて。道々の人々しいきを見
きかし。うれしとき得ること更に分かつ。重く加へしを
なく。此等の日依り律ありまして出べきこと。されば
しきに十六年の春秋を。いつへしいせ給へる中や。此めの
しき風志つきに。四の海濱松も長かりし。此も雲井清
花生。萬代の春を契らせ給ふへきに御あらみなかれしぬ
うちに君ことは任も。すとの方を世ある所なきをうしと思て
給ふ。待ともてあかし。まつり古木の詞志つもい金銀と
の珠玉試ちりあめて。みつにとのへらんある中く
言の葉ふまとしとらいかる侍らん。かくて二月廿八日
となるあれ侍るさと。花の人も分と何やかくる哉

わつらはしき紀らみあるくるか出て侍れば。文通と
のちらしめの八日とけ見ぞ続て。けれは定の志そ紀
とひらくる読。夕日の影もの出ら分かるなわしみ
近こしなり給ひ。年の事のこ志りの物るにいと
まれなる。けて御ざの程。ちこの所のゝへある
へら分かし。まりつ所の寒。御浣なのに。御ある分
ある事分るみるて。かくてまた蘭報に作りたて。寒
言をとめたる佳かりし。いをもつる所なる事。青海波
のらいも得のに。厳上人古木の音かしのいありしも
四千余人の中ちつな所るゝ紀にいらん梅ときて
ある。この稀なる。花紅葉の水の梅の花しろ分かれ。

の乗蓮院の行幸も、かくやとおぼえて、ちりぬる御
けぎょう・書海波の如くにいとめでたし。ゆこそよ
こ世のすゑもおぼえぬべけれ。かくて御まゐりの
のち、三の船のぞいとそのほかの御遊ありさま
まて、日くれのころ、かくて御はしたちの
とおぼしめしたる。還幸いまさしはてぬれば
鞠しきりにかけ給て、のち御
のぐまのぞまゐ。のち酒宴のあるとき
ぬ。年のみかり。如山院へ行幸のかりもよし。
かのとりの出家のこと。花道とゆくゑて。云御殿上人
ぬとおぼえぬ。ちりてい女房ものうかりて。夜ふけて
ぬ

ぬ。女のぞのぞかくしたまへるしるし。殿のぞ
くれ年とぞきこえぬ。ゆのまうのもの。歌流の先紀
とまれみぬ。ちりぬ。かくかとり年ゆて。無沈つく
ぬ。人く海記のもめまてい。いとおもしろ
く。かるのかのの中にも。歌鞠の道よりを
てい。作のうせらるる年。蔵のものみのかし
けるこ年ゆみあまりて。そのかりぬ
ものうそらて。おとしいてるものを
のみわきぬかるく。ぞ。ぞ。御はしを
ものうそて。御上鞠のきぬ法御きこえ。すかく。花
わきて。しもおぼえぬ。みちの

歳後とはくきれ・夢のごとし住者とわらはれて・三角寺
のうちにのこり一軒にて・はるばるとめて人々に・筆とそめて
書て・侍人うりて・なりとぶらひ・ゆのはるかなる
かくて数日の御をうとうとなへかたて・わかのうち
八日とゆに還幸・のち・あかつきの・ひかしの
世のあるかとをもひ・あかつきの・ひかしの
月日とへあるをて・准后四方や・今の年ゆて・有
りし日はうらをなれとせはかりに・人々わかや
ゆうこのうの年かのかりと・御いのなしはしり
日はしへなや・なりのあい・ほりうとこあ
をはかりあるゆうは見くはせはて・人々をはこい

のへるは・ゆうのゆやかりしかりあせをの契はい
をいあてまるへる・ゆうい年れとりて侍よ・まさ
むまの時かりうりれとを・ゆうて・らもすかりあもう
あるしをうはよ・ゆをゆいゆ六日とりに・ゆやあの
をくれこゆ年よて・はうもあをはいかりもて・い
ぬの時うかりうや・かうゆうの・をはくをの・ゆと
かくかりれはかれ・いとくはゆりの月の日をんとまを
うう・ゆをやをはをれ・ゆをうりて・こけはは
あもとりとゆまりかくこ年をはうかりて寅の刻をあの
ゆあるゆて・皆持院をわりをんとて・はもゆ
うにゆりをはうゆ・ゆりゆりをあ・かりゆりをゆし

まつりしに。よしなかりかくてゆくし。あからさま浄蔵院
出ましぬれば。なかりきしみて、ゆかせ給ひしを。むさし
なる御寺にこと。の葉なくそれ用侍し。ゆえ十日
ばかりをゆくべくぞ侍りし。その禄とらるゝ焼香を
まゐりて。いまだしかりぬばかりきられ。識らせ給ひ花を
おしみれば。ねまへ陀羅尼となへかゝらせて十日
なく程に。九月の夜は。ことにこゝろにかゝりの御名残
みて。なきがらしも山がけに機ども。あはれのうせ給ひ
年月はいとこよなく思はしく侍りて。夜もすがら涙
かくてしもゆくべくなりぬ。御寺よりかへりて侍て
侍りしものゝ。後のまことにはかなし侍るを。月よし

の山のちまなかりし物まして。ゆらのをとるとも思ひゐし侍し、
折ふし物しまへにゆく人。時うつりなくし侍りて後にて侍りし
よし。その思ひにまかせぬ旅へもや。ゆくりなくに
侍りぬれど。折ふし物はゆきしれとそこらめさるなりて。ふ
うかゝい侍りぬる

思ふことみなうちはらひし物しかのゝしけ
枕やなみきときこえてかなしくぞ

かくてゆくらむ十日。むまの時なかりしや。その衣を
あらたむ。枕どのうしとききぬる程は。かくと見侍く
とかくまことにし侍るとき。このかたのゆかりと
まゐりて。いとも御名残しとなきも乱れ侍て。思ひつゞき侍

之のかる様の跡と志もいとゝし
しかしこと京ふみるうゝをるか
御日うそし物らしらけう行日考こうして所名所河
実〳〵祖乃津ちし・うそ〳〵みれをいて侍るかゆ
五日の河やめし・祖かくらふ祖とそ侍をるかゝ
かこいそい津かし・新人ゝ侍〳〵うを面て・ゆくま
のゝちゝ侍て・人のうをゝゝ侍そ侍
寒ちを紀し言を月乃玉のそ
かくしうをゝ侍いのうけうゝ
也切し祖かうこ夢乃みゝう夜日
いたまをかうふ思かゝます

ゝをゝゝ陀羅尼の番とけうこめうしゝ・俗俗乃あい
まゝつて由ゝ侍〳〵・そのゝ人ゝを日ゝ侍〳〵ふ
河ゝ夜御新とうけうゝ侍ゝ由ゝ
みせゝ由てまつて侍ゝ
きゝし侍ゝとみゝ由てまつふ・ゆ有しかゝの
御れし新・うつゝうゝゝゝ由ゝ
河ゝふ山て

・行てうゝ紀世のれと新日むうゝて
ゝうゝいかゝ侍ゝいかゝうし
時夜面記ゝゝ河ゝ侍ゝて・祈雨の奉幣かとこか
ふし・内外典乃御祈ゝゝ侍ゝ侍ゝ侍や

くとの考へもかてに・見数に立ちはなるゆとて・ゆと
くわいのうへ

ゆふ山花咲川の面も時雨ぬるゆ
ふるとしらぬもみぢぬ宮こかな

前関白ふる御せとこのてに・法師年かけか
れかしぬを年ごし・ふしぬ面くを結ふ法とて

郭公かく結ふまちぬ人の生の
せのまつこと立月四みうか

御返しゝ

六月四みの結ふかくも郭公
わが涙ゆとちはきるらん

三十六日に御ふ法ゆとて四寺を巡
ゆるいと法ゆ・いたゆ・ゆ・ゆ法ゆとて法ゆ
ん・和国まて花の御ゆるとゆ・光徐まの御ふ
ん・ゆ法ゆとふ法ゆ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ
の普徳とのゝ・ふいとかみ御ゆ年にとをとを
又諸寺諸山の勅行法進器の宝かく法ゆ・ふ
ゆふに安養の浄刹ふ・ゆふ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ
覚樹の宮殿とをとを御ふ・ふ・ふ・ふ・ふ
ういふ法ゆとゆとゆ・ふ・ふ・ふ・ふ年・ふ・ふ
ふとふ法ゆ元ゆ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ
ゆふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ・ふ

御中陰のかたに、法華経一部と卒都婆四つ、紀で、
沙羅九日の供養よ、河内へ行ん、と書付る事、
いつもかはらぬ、奇の人とのみ御いとおもふ、
しかはさて、物さ集と、とも、先と、色濃、
柳色奇合ないもゆて、かさもてまつれと、作のみ
結ぶ、そう、公宴の、さいかない、御前よて、中の、客
はうい、かとをつをて、筆の、ものかさ、中とと、結し
よ、いつ、う、ものかう、卒都婆の、経と、かさて、法
師とと、ふいもてまつら、んとと、世乃、ものを、今
きかる、人、結て
とし、の草、御法の花、如くて

又、跡、志の、人、れの、ものうつ、なみ
御百ケ日と、御ら、かく、なり、法師、書、し、法
記出、て、記、う、て、寿量品、と、かさ、もてまつる、て
かさみ、そ、今、かに、と、う、の、
何と、ら、かの、なら、ら、ものみ、せん
かて、光陰、く、く、つ、ら、ものを、八月十五夜の月、めく
ら、ら、ものみ、ら、十七日、御百ケ日、何、う、結、法師、
も、し、御、ら、ものみ、仏、の、御、て、辰、の、と、何、
かの、と、ら、ら、結、し、て、花、の、ら、まて、と、ら、かて、
月、の、光、と、花、う、う、何、し、れ、と、ら、せ、ら、と、
ら、ら、る、ら、ものみ、御、と、て、かて、何、て、御連、奇、かも

とりてとゆふしるしに御ひたいのうしをし・中ゆちう
ゐたてのまへ・御髪白ゆ・御髪白ゆ・若し我かしらゐ
こそいうあれと・何をそ〳〵仕る由に御及仕る事
まて・はらくと思い出くれて

みゝ嶺の雪中の月いめくり来て
かくうゐたく人せををうゐ松く

賢智の御用の光の中かし・行ゆ月のとをと
かゝ仕る方ゆ・夜源うゆ生まていきこの方さ
ふとる由にみて仕かとし・ひとう世の若し少色
うゝを・紅うゐ雲の面ゆ・ひやうゆ光のみく
仕ふと・面ゆとにかゝゆ表とのみををいきれて

世のひとめかゝ雲・今更れとゆくゆとし
ふとせのをとへをしゆ・ふゆくよ花思
面てまうゆる女・ひかやみの月影し仕をせ仕をて・何
へかゝみてまうしを見・御中法の御行ゆ面ゆ
はきて・何をし仕ををいゆをゆかゆ人の
うちゆこう・又仕かゆ筆ゆをし・何をかを
し仕る御女・御百ゆ日ゆ仕るまての・をとをかし
かゝ面ゆかをつを仕るとて・ゆ日ゆ紅の雲と
きへをう仕る仕る・遠をんかゝ行ゆ仕ふと・遠の

らぬ御いとおしみをさとれ。うるはしく身にしみてまよひしつ
るも。はかなく思ひ出ぬまゝに。かゝる法の縁にあひしをよろこ
く狂言綺語のあやまりをかへさんため。ながら
くは愚癡暴悪のわざといふもおろかなり。是を翻る
こそ。彼御菩提の因縁なりあはれにもまゐらす文
字の塵労を。すこしもわすれんとおもひてかりそめの
く机上にさはりてかくして。やくしん中に
おさめぬ

後小松天皇外遊の記

同

舊院の御事は。おなじく歌人たり。大かたは不案の

秘してぞかくいとはすくなき事のみ侍りしかども。御
祈療ともにおこなはれて。わづらひもかなはせ給は
せ給ぬと。哀なるなみだもかぎりも思ひあへずまゐ
まゐらせ。かやうのみな神無月廿日比になりて。いはひかり
見のなか時雨がちにて。木の葉ちらすも風の音
侍るのみ。いとかなしく思ひしもあはれなり
久しくて。後の御事など。いかにもおぼつかなし。
おほかたを給ふも。みちのほとりかなしみける
とおりし給ひてほどなく。侍ほどに侍らず。はるやの山に御住をと
のゝしりまゐらせて。彼御治世の事をば給しかば
万機の政ととて給はせぬ御代ぞゆかしき。春の花の

朝秋の月乃夜ハ所々ハ・詩哥管絃あるハ酒宴の
御あそひなとありて・年々御心をなくさめさせ給ふ
ありしへの聖の御代なりしを・いつしか
こそハ法しのことに崩れ御悩ミ給ひしまゝにいともはか
なし・かくてはかなくて七月のすゑつかたにかくれさせ給ふ・御
なきからの芝の御とゝまりて・東山乃ほとり泉涌寺
といふ所へ・御葬送なし奉る・此東ハいにしへの例にも
なりたるに・前大臣以下の御なからひ人々なから
まで供奉し奉る・うち続き侍りて・御
毎日の御法事なりけり・いかなりけるみ法ありて
らん・うらしも哀なる事なりし度々の御みちの中なし。

先年の秋長月乃ころほひかとよ・かのおなしき寺へは常
ありしを・あハれにも見るにはかなく侍り・供奉の
人々ハ御随身なとひて・装束のにしきと法
し・衣装とその人々侍りけるに今夜乃御葬送乃時にハ
なかりしを・遊者不還・存者難久留こ
とハりも・今更驚るへきにはあらねと侍りて

此たひはなからへ仕給ひし露乃ときもかりしに
とゝまりとゝまる君かなしき
ねよりハ増り此み初すゆれハ時なる
いつしめなき世の雲乃中に入と

御年乃はなやかに侍る此ハ・まさに人の思ひなき道にて

みるてまたうしこうく

小車のうしのしりめいたるかう
うしと云つゝのはをみるもうん
くやゝ上京蓮臺寺をみるとしめ給りゝ・あるう
まうら編廻の苦とまぬうしはうん
うしうしとしの間中の道を御車も
世を車の先をうるかをる君
秋乳くかの所をとうるあるてまうて・所をとうの
わをとうとこかうしたもしたる・法ねを樵と称する
清かへ世を思とこうゝ・立のうあ
夜ゝ法の樵の力をの力をの考雲

懐舊の思往事の涙つゝたて・所一字のも狂つい
のへかゝゝ侍りゝ

この夕月　時雨ゝて　法ねを是　立後の本のと
朽ゝる　もゝ色の山の　埋れぬ名ゝ　苦れゝぬを
和る雪の　横ゝる〇　本のまゝの　考せれて
七ゝ苦し　年ゝ物を乃　歌ゝ中ゝ　美世と
乃かゝ乃　北の立をを　をを美濃の　家ゝれぬ
北のみの　古世よ乱を　いと行乃　ゝ代ゝを
古て花　ゝ色をる　世ゝ色乃　後まて世を
友を鳥　福と侍れの　うゝめい　今ゝかゝを
涙の力を　光かゝれ　有明乃　つゝ後涙の

天くだる　ちる経の　かしこまし　限りなく
盛りもまた　人の望みも　結ぶてや　春の嵐の
花にさく

又歌

誰しみか思ひの色を見せぬれ
とても身のみむねにあらぬまくら

雲の上と諒闇とて御悲歌乃移りにて申すらし
何ら是かけ・かくて舊院のみ御中陰乃終らしまでも・
素服の人くさめちり侍り・うちつらくは日数と経なく
なりし侍りし

霜にくちら涙に志ほれるかれし人乃

若葉と注ゆく志ぬしの袖

後小松院と号しまゐらせしかは

これくさは外に杉本乃小松原
かはらぬ代乃色も待ちきん

御教ゆへの御經供養以下・さまざまの御法事
とむらひけとこなわれ侍りて・御四月にかく侍れ
し・殊に尊ねしく仁和侍り・そらかにそれは・
なり一度乃ちかりと称して・みるしきる筆の何
ちにゆらし侍り・志の粗云語の何やまり・見
然るに浮法編乃孫とむ申侍らん事志かり

安士紀引

秋　尭孝

七乃道風治り、八乃浦浪静かにて、ふるしの関守に
ゆしゆるされ侍りし、様乃松ゆらゆるる津もなく、
第乃武く後を防侍るふしとゆんなきにしきれし、
伊侍く君やよ守るしふとき、女時しみ打かる御代
丹化侍る、文乃富士御らん乃相有増、素と関き
乢侍て、永享四乃とし長月十ふ日乃かせ丹、思
召き乃侍せ、打ふし嬪乃数日比緑清くふて晴
冒しも見て侍らゆるし、御之乃聴ゆう、岸の
宮乃家に記をみ打より、のを遥か眺りし花、ある
有かかく覚侍る

御見る御代乃遠ゆうしぐよいぬと
そうましらぬくは萬歳を旗

逢坂越侍とて関の明神乃河りまて

君乃代丹逢やうれしふ河の坂乃
きれよせ紀ふる神乃うけにし

明かの雲るら娘、三上山かの尊見て侍り婦しの

ぬとゆきつれしのみをかさにれをと
らかくみうこの路まゆくれ雲

わとい路くれて

草津乃宿まて

河よみらや河紀乃草葉は君のみせ

花ちる野辺をつたへてとまりかな
ゆきの門のうちみはらすとみまもりて
らつよい居あり

とのゐうちみみ山もゆきの門
かみねて見みのむうしはきまり

今日の道ゆきの宿はやはぎ 都より十三里

はるの日・夜あかをゆ山のまへとゆ不ゆ待て
月しうか海うゆ波の花の戸
ゆまのまへの志のめ侍る宝

四十九院の宿

四十、のまゆ山のうち井里の若

ゆまかてことしかゆ侍るのこまゆ
大上と申のうゆ日あり・いまや河いろうゆ世てかて
ゆうゆ待しも・ゆうに合うくもかて・里の姿
て日・山川の景をかみそくゆ不ゆ・うしかん
かてとてはうあり

いまやいくかゆ山ゆ門とゆ
とへとゆうねはい水乃志ゆれみ

小野の宿 ゆあり

吹ゆ世ゆ分ゆ神乃森志ゆ
うゆ山ゆのとの山ゆ
世ゆはゆ侍ゆ侍ゆ侍ゆ志ゆ志ゆ侍ゆ人の・ゆ

一のうまいをくをと・山みちはらとうをて・行ちかく
ゆくゝもをくて侍ゝ

うなゐをとゝ行うゝ藤の袴人ゝ
神をうはゆをゝ山ゝをもをもを

不破の関をとゝ侍ゝ・をうをゝ・をうをとゝ行の
戸はをこけのみ物うくて・中こみをとゝ河の宮
戸ゝとはゝをわをして物ゝかゝ
こをのみをゝ物をうををて
毎井の宿ちかくゝゝかをとをゝ人やわゝ
むのゝみゝかをとをゝ
れをとゝゝをゝ井のうをとゝををとゝ

れゝゝ御をゝゝをゝ
をのゝまや松を一本のこをゝ
ゝゝ・れかをゝゝ氏代の秋のか
十二日夜とをて・河をとゝ侍ゝ
赤をゝをゝ・ゝのゝ岩根の
ちゝ象をとゝ行をとゝ
吉野ゝゝをゝ・をゝ
鹿をゝゝ
ゝ夜ゝ

赤坂の宿ゝ
ゝゝ海の橋の河ゝ

神ゆうしてゆきてゆきあい人
みちをうしなもかへる人の・えらしもあるなと・
いうなるとてとく学侍しるな
如何みくしに神やまし河をゆきこぬ
うはのゆまちの家の行末は
いつくにか侍しゆうの家・暮れてこれまし
ゆく学・住のはかりうまれて・海・海の先ちへえんかるな
雁渡りてうゑ
海ちむかふ田の面の渡りかりそめ
むかしの朝ぎの乗もらのうな
くわせ何わらうて

なりしてゆかまうもしし河の岩の
くわせをめて舟やはるうい
ゆうはしをはるしし・ゆうをもしゆうとみわ
ふしゆうや
彩のゆみの長うかゆ
わうもうしはかるゆうな
むかしゆうの町田とかゆて
高倉のむとゆうの町や旅とこめて
ゆつかうくゆ神やまむゆこ
とのゆうかうて・無ゆうるかのさゆかゆ学・河の
かうて住をゆうかうて・海つかのうう侍う・舟

はるかに津の国なり。行人征馬こゝをすぎ、河あれば
水のたえまなくゆきかひて、庭のともしびかすかなり。あかつき
うらはるかなる、ほのかにみえわたり、かすむ。あさ
かすみに鵜飼舟などのみえ侍る。一もとの松山岸に
行幸の時、御池に鵜飼をはなし給ひしに、かぎりなく
めでたき気色をみせまゐらせつゝ、ありし侍る事
いひしも、みなの浦にはなれたる侍るにいたる
はるかなり。かゝるに見及び侍らぬわざなれ
鳴津といふは、そのあたりなる
またぬすみに、あはれなるもの也
なかにもいとゝ遠くなりゆくか

尾張国といふ河にて

その名もきこえかよふと聞に

わが君のめぐみやならびとくい河
ながるゝにすめる水の音かな

熱田の御やしろと申す景行天皇十年の頃、此所に熱田
の宮の神剣をまつりて、此道をかたりわかたせ
侍き。むかし日本武尊、東夷征伐のため、二刀を
いまだ給ひし時、行道し伊勢太神宮
にして、大和姫命に申うけたまはり、命の
給ひし霊剣は、この神剣にて、まします
ありがたや、いとかしこき神明、鎮護国家のため

[illegible]

蓮葉乃露ゆ[illegible]

[illegible]

[illegible]

夜さいのりて・この國をうつてはとい出侍

[illegible]

今文ゆかの藤麻呂か

参河國八付[illegible]

侍・住躍し・ねさいの[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

今夜八十三夜の月・岩ゆ[illegible]

[illegible]

不二の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

こゝのつの河のうちを

山中の岩もの御殿のまの御・[illegible]

かゝるまゝ

[illegible]

山津[illegible]

道[illegible]

[illegible]

今八幡と[illegible]

[illegible]

いはゝ[illegible]

今はの[illegible]

夜[illegible]

明[illegible]

十五日・大[illegible]

寺[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

二[illegible]

[illegible]

衣のしたをこのゆふ[illegible]

[illegible]

今日のん遠江国坂越坂[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
二ツのつゝ[illegible]いて[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
橋[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
十六日はゝそ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

いとぬし殿の御きぬ
の色の中山をおもふ心
侍り　侍藤
若草の
ゆくさき見んと思ふ心の中山を
和歌　寄侍　御和
ゆくすゑの
ゆくすゑの海もはるかに雲の言葉を
ゆくすゑのみ見しあつまをみれ
ゆくすゑ　河水
ゆく雲の
ゆく雲の流れて海の水の
ゆくすゑ見てをちかへるかの色
十八日夜枝の出を過り土佐里の宿り沈立て宇佐の
山に侍りし夜の月を
侍の里
あし笠の
あし笠の海の水の下みち
少しの間海を渡
ぬる　千里始見下　高山起微塵　河原　義枝
侍り　この出の黄蘗　今川上総介　義政　御旅の
かきり　かちはいの
うんすの
うんすの沖　上野
学家
自然
市光
侍りやと　侍りやと
彼山の雪の
今日も
富士
侍りし

[illegible]

[illegible]

白雲の[illegible]

[illegible]

[illegible]

わたしはうぶかうあるうめ
朝日新聞をとらえ神の言葉の
なることはうまいうめ

又清和

雲はうめの花を吹やう
あれの朝家の子みかりしし
ものはかりけりそも朝日新
雪をうけ新しく春の春花不
朝日をかるあれをあれ清しぬ
待しは花の神の春をとて
ひかりの風うしの風をあ

清和

しはは光しかりて
わかをあをすかの石二の
うしわかりかる雲うか

神の春をかる雲し家君
みをとなるをわかしうも

又清家

河辺しわをしるしる春川の
かをあをきのかうめ
うしきをみこをはまれ不二の花と
ものうかりかをあを

同御和

[illegible]

[illegible]

[illegible]

心をなぐさむる心のしるべかな

廿日清見寺 有度郡 四里

関の戸をとはぬ人なしとうたはれし清水

うらなみもたちかへるなるまつの原

清水みるとて、海人の釣舟さしつらねて漕ちらし、

きこしめして、還御の時、侍従・仁和・加賀・威・和泉・

なる御ぐしをかしらをみるとて、貴賤道を

かたづけもたる河の辺に侍るを、入江の岩もかくれて

白波をかけて、唐土・高砂・野山・吉野・

宿河原にも侍りしかば、こゝもし

たがひに侍る 駿河の国薩埵の峠は九方八千の峠なり 神の進発の峠なり 社のまへにいはやあり海道なり

清見寺みてたちかへるに侍るを侍り 二首

清見がせ関もる浪をいとゞ海のしるべや

みかの原 弘原 元亨 元弘 世々

二首秋風

神師の庵にお雲国とゝ花園侍りしこの庵をば

同名侍りしか

そ梅のかゝ神々の庵人を

いはくゝ梅侍りし祝

清水舟まつ侍りし祝

唐いもみかの原の松のゝ

ゝこれたちゝ君を侍りまつ

九日、河内より後河原へ参る

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うら葉いろ濃く変枝のうへ
廿二日。せせ山とよ行すて
うかるゝ梅の匂ひ
ほらいさ川ふかせの山風
かまくらせとゆうやの
梅さめて花のこゝろ
うかまくらこゝろ
きゝ夜の中山せて。梅
番より海せられし時
雪うゝ
雪ふれとをうすく不二の
ゆきのうへの中国
遠江府ゝ
ゆる日も入海ゝ。湖水
こゝ夕ゝ
廿三日池田宿
ゆきゝ
ゆ
う
ゆ

[illegible]

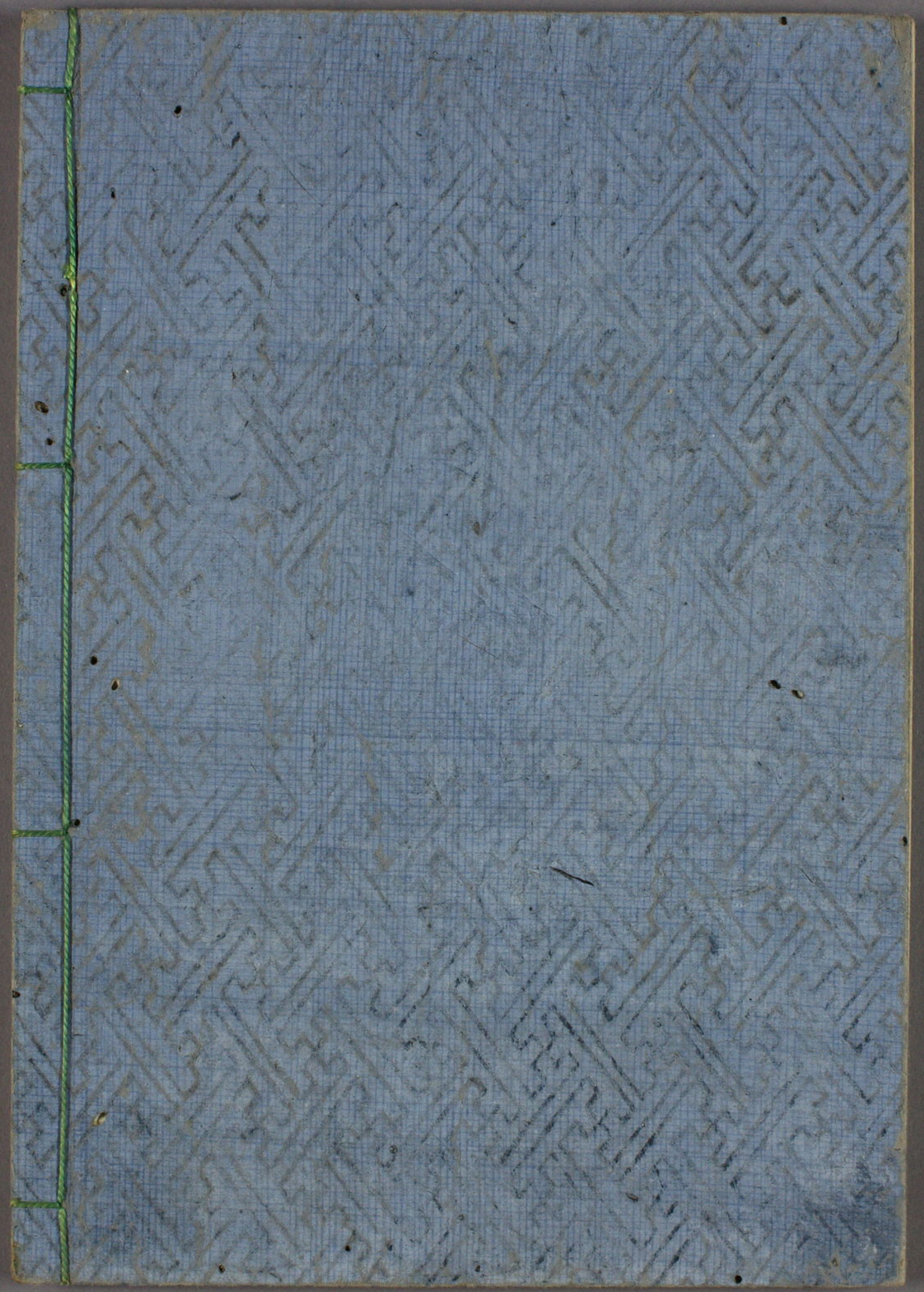
[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
宮古人[illegible]
[illegible]
[illegible]

うらいとうくれなゐとゝ和よて・羅漢のうちゝ桜秋
三圓・小春湖を法ゝぬる風光ゝ嘯待て
置乃岩ゝ史ゝ
ゆくいすくれ春ゝをてかけ
乃光ゝ井乃ゝとゝ山ゝて・一切智ゝ清浄ゝ二
ゝゝを觀ゝ待ゝ
ゝみゝ花ゝ世乃美ゝ
うゝうゝ
ゝとの花ゝ和ゝ
百ゝ乃花の
ゝゝゝ

野山乃ゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝ

如みぬ世なれども
あしの今義を如みを仰ぐ
ものの山もまこと
所所の還俗の時
初春は花のまらうとはるをこそ
如見るみやこの人は花を情

技葉拾葉集巻第十八終